
頼むからパパのことを聞いてくれ！

村雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頼むからパパのいうことを聞いてくれ！

【Nコード】

N7200Y

【作者名】

村雨

【あらすじ】

ありえない死に方をしてしまった俺。

死に方が面白いという理由で転生！？

もらった能力は二つ。でもそのうちの二つはこれから行く世界では

まったく使えない！？

まあがんばって生きていこう

更新は不定期です

プログラグ的なもの（前書き）

初投稿です。

すごく短いです。まあいろいろおかしいところがあると思いますが
大目に見てください。

感想待ってます。でもあまりひどいことは書かないでください。
誤字脱字あったら指摘してください。

ブローグ的なもの

…ここはどこなんだ？

俺が意識を取り戻すと目の前に幼女がいた。

…なぜに幼女？

「あつ、やっと気がつきましたか」

いや、なんでこんなところに幼女が居んの？

「ああ、そういえば自己紹介がまだでした。私は神さまです。

そしてあなたにはラノベの世界へ転生してもらいます」

は？転生？何で俺が？っていうか俺死んだの？

「はい、死んでます。あなたが選ばれた理由がそれです。思い出してみてください」

えっと、俺は一人で暮らしていたはずだ。

んで、会社の同僚と飲みに行く約束をした。

そして出かけようとして筆筒の角に左足の小指をぶつけたんだ。

…ん、こっからの記憶がない！？まさか俺は筆筒に足をぶつけて死んだのか！？

「いえ、違います。実際はそのショックにより気絶。

そして運悪く卓袱台に頭をぶつけて死亡しました。」

よかったよかった…ってどっちもどっちじゃねーか！

ん、さてよ、まさか俺が選ばれた理由これ？

「はい、そうです。あなたの死に方が面白かったからです」

おい！適当すぎだろそれ！

「まあいいじゃないですか。どうせ家族も居ないんだし」

…まあそうだが。…仕方がない、どこの世界に行くか教えてくれ

「それは内緒です」

…は？内緒？

「でもその代わりに好きな能力を二つあげましょう」

じゃあ一方通行のベクトル操作能力と黄金率をくれ

「分かりました。それではがんばってください」

最後にひとつだけいいか？

「何でしょう？」

結局俺はどこの世界に行くんだ？

「…まあいいでしょう。教えてあげます。」

それは『パパの言うことを聞きなさい』です」

おいそこベクトル操作意味ねえだろ！

「家事全般は一流以上にできるようになってます。
それでは今度こそいってらっしゃい」

「まあぐだぐだ言ってもしょうがない。行ってきまーす」

俺は目の前に現れた扉からでていった。

小鳥遊家での出来事（前書き）

今回も短いです。長いのを書いている人のすごさが
小説書いてみて初めてわかりました。
誤字脱字あったら指摘してください。

小鳥遊家での出来事

え〜突然だが、俺が転生してからもう20年もたった。

なんだって？時間が飛びすぎ？だつてとくに何もなかったんだから仕方がない。

本当に何もなかったか？うーんそうだな

俺が生まれてすぐに両親が事故で死亡。

親類がいないんで孤児院に預けられるところだったのを親父の親友の瀬川さんが引き取ってくれ、俺は瀬川海斗になった。

それから一年位たつて祐太が生まれた。両親はもちろん祐理姉や俺もすごく喜んだ。

それから数年たつて父さんと母さんが死んだ。んでそこから大体原作通りなはずだ。

まあ原作と違うところといえば、俺の黄金律で金には困らなかつたし

あの幼女のおかげで家事ができたから祐理姉の負担を減らせた。

後は祐理姉の趣味を偶然知ってしまい、強引に引きずりこまれオタク趣味を持つようになった。

まあ前世でも少しはオタクっぽかったからよかつたが…

まあそんなこんなでいろいろありもう原作は覚えていない。

まあいいか。精一杯がんばって生きていこう。

俺がこんなことを考えながら歩いていると目の前に表札があった。

「おお、これが小鳥遊家か」

俺はそんなことを言いながらインターフォンを押す。

「いらっしゃい、おいたん海斗」

そこには祐理姉とその娘ひながいた。

「遊びに来たよ祐理姉、ひな」

「そういえば祐太はどうしたの？」

「ああ、祐太なら用事があるとかで大学にいった」

「そう、残念ね。祐太をいじって遊ぼうと思ったのに」

「はは、また今度にしてあげなよ」

そんな話をしながら俺たちはリビングに向かう。

そこには空ちゃん、美羽ちゃん、信吾さんがいた。

「いらっしゃいお兄ちゃん」

「いらっしゃい叔父さん」

「やあ、よく来てくれたね海斗君」

三人に迎えられた俺はそのままイスに腰掛ける。

「そういえば海斗、お昼ご飯食べたの？」

「いや、まだだけど」

「ちょうどよかった。一緒に食べましょ」

そういつと祐理姉はキッチンのほうへむかっていった。

「あつ、手伝ってきますね。信吾さん」

「ああ、たのむ。ひさしぶりに君と祐理の料理を食べたい」

俺は祐理姉を追ってキッチンに向かった。

「祐理姉、手伝いにきたよ」

「あら、待っていてくれてもよかったのに。まあ手伝ってもらいましょうか」

「何作るんだ？」

「ひなの大好きなハンバーグね。後はカルボナーラかしら」

「よし、カルボナーラは俺が作るから祐理姉はハンバーグ頼む」

「ふふっ、まかせたわよ」

「ああまかされた」

テーブルには出来上がったカルボナーラやハンバーグがのっている。

「わあ、どっちもおいしそう！」

「まったく、お姉ちゃんたら。まあほんとにおいしそうですけどね」

「ひな、はんばぐたべるー！」

「ほんとにおいしそうだね祐理」

「じゃあ、食べましょう」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「あーおいしかった！」

「お姉ちゃん食べ過ぎてない？」

「ななな何言ってるのよ美羽！！そんなに食べてないよお兄ちゃん
！」

「えー、空ちゃんは俺の作った料理おいしくなかったのかな？」

「違います！おいしかったです！」

「ごめんごめんちょっとかわいかったからね」

「か、かわいい?……え、えへへ／＼／」

「あらあら、いいわねえ若いつて」

「ま、まあ海斗君ならいいんじゃないか?」

「な、なに言ってるのよお父さん!／＼／」

「じゃあそろそろ帰るよ。」

「もう帰っちゃうの?おいたん?」

「うん、用事があるからね」

「また来なさいよ海斗」

「今日はありがとう海斗君」

「さようなら叔父さん。また来てください」

「またね〜おいたん」

「また来てくださいねお兄ちゃん」

「ああ、また来るよ」

俺はそう言いながら自宅へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200y/>

頼むからパパのことを聞いてくれ！

2011年11月22日02時56分発行